



富士三十六景「甲州伊澤暁（いさわあかつき）」

はじめに

「甲州伊澤暁」は、江戸後期の浮世絵師・葛飾北斎の代表作で、石和宿が活気に満ちていた当時の様相を知ることができる資料です。

富士山の背後がわずかに明らみ、旅籠のかやぶき屋根がうっすらと明るくなり始めた暁の刻、いち早く荷造りをすませ、甲州道中を旅立つ人馬の姿が描かれています。旅人の行く手に見える石和川の川面からもやが立ち込め、鎌倉街道へと続く鶺鴒橋が浮かび上がって見えます。石和川は現在の笛吹川、鶺鴒川とも呼ばれ鶺鴒漁が営まれていました。

本紙は、甲州道中石和宿と、800年近い歴史を持つ石和鶺鴒の文化を学ぶための資料として作成しました。笛吹市の文化を再認識し、語り継いでいただければ幸いです。

資料提供：山梨県立博物館 鶺鴒山遠妙寺

【お問い合わせ】
 笛吹川石和鶺鴒保存会・笛吹市観光商工課
 山梨県笛吹市石和町市部 777（観光商工課内） TEL. 055-262-4111(代)

甲州道中と石和宿

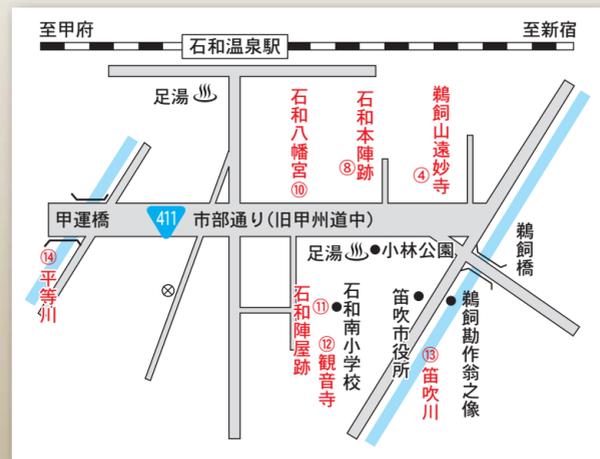


笛吹市石和町市部を横切る国道411号は、正徳2年（1716年）に「甲州道中」と呼ばれるようになりました。甲州道中は、日本橋と下諏訪宿を結び中山道に続く全長219キロメートルの幹線道路で、慶長年間（1596年～1615年）に徳川幕府によって整備された五街道の一つです。甲州街道と呼ばれることもあります。

「石和宿（いさわじゅく）」は、「甲斐国志」に、「八代郡市部村を石和宿とした」とあり、現在の笛吹市石和町市部に置かれていました。甲州道中には45の宿が置かれ、石和宿は日本橋から数えて38番目の宿になります。

甲州道中石和宿は、江戸と直結したことで、人馬や物資が行き交うようになり、宿場町として賑わいを増すこととなりました。

- ★1・・・宿（しゅく）は、街道に置かれた駅のこと。宿場。
- ★2・・・甲斐国志は、1814年に松平定能により編まれた甲斐国に関する総合的な地誌。



現在の市部通り周辺（略図）

甲州道中分間延絵図に描かれた石和宿

文化3年（1806年）の「甲州道中分間延絵図（こうしゅうどうちゅうぶんけんへのえず）」に、当時の石和宿の様子が描かれています。石和宿は、長さ5町（545メートル）、家屋85軒が建ち並ぶ甲州道中の宿場町で、鎌倉街道との分岐点にもなっていました。

また、石和宿は、笛吹川を通じて富士川水運へ連絡する船着場も置かれ、甲府盆地東部の水陸の交通の要所となっていました。

絵図を東（右側）から西（左側）へ進むと、はじめに①石和宿入口、続いて②字仲町の境界、③高札場、その北に④御朱印地遠妙寺（ごしゅいんちおんみょうじ）、西に⑤間屋場があり、その前から南東に⑥鎌倉街道が延びています。

- ★3・・・甲州道中分間延絵図は、江戸幕府が街道の管理のために道中奉行に作らせた地図。
- ★4・・・笛吹川は明治40年の大水害で約1キロメートル東を流れるようになった。当時、笛吹川があった位置には平等川が流れている。
- ★5・・・富士川水運は、甲府盆地と駿河湾を結ぶ水上交通。富士川舟運とも言う。
- ★6・・・高札場は、幕府からの注意書きや宿賃などを書いた札を掲げる所。
- ★7・・・間屋場は、馬やかごを旅人に用意した所。現在の駅やバス停。



甲州道中分間延絵図の石和宿周辺（山梨県立博物館蔵）

さらに甲州道中を西進すると⑦字西町となり、北に⑧本陣と脇本陣、西に⑨高札場、その隣に⑩（石和）八幡宮の鳥居が描かれています。本陣前を南下すると⑪（石和）陣屋、⑫御朱印地観音寺、さらに南に⑬石和川が流れています。

絵図の左端には⑭笛吹川が流れ、石和河岸（いさわかし=船着場）と西側の（甲府市）川田村の間には、渡し舟が運行していました。川田村へは、冬場の湯水期は橋を渡って行き来しますが、増水する夏場は徒歩渡しや渡し舟を利用します。

石和河岸からは、笛吹川を下って年貢米や物資を富士川の船着場に送る舟便も運行していました。

また、甲州道中は江戸からの身延参詣の人たちが通う道としても利用されました。十返舎一九らの「甲州道中記」に、石和から富士川まで舟で下り、身延山に参詣する様子が記されています。

- ★8・・・本陣、脇本陣は、公家や大名、幕府の役人が休泊した宿。
- ★9・・・石和陣屋は、石和代官所の建物。
- ★10・・・石和川は、現在の笛吹川の流れを流れていた小川。鶺鴒川とも呼ばれた。
- ★11・・・徒歩（かち）渡しは、人足に肩車してもらったりして川を渡る方法。
- ★12・・・甲州道中記は、浮世絵師・十返舎一九により書かれた旅行記。

石和陣屋（石和代官所）

⑩石和陣屋は、寛文元年（1661年）に開設された石和代官所の建物です。代官は支配下の村から年貢を集め、犯罪を取り締まるのが主な任務でした。現在、石和代官所の跡地には石和南小学校が建っていて、陣屋は残っていません。校門の左手に石和陣屋跡の石碑が建っているだけです。正門は、明治7年（1874年）に八田家御朱印屋敷に移築されています。



石和陣屋跡の石碑



八田家屋敷に移築された石和代官所の正門

旅籠と石和本陣

石和宿が置かれた当時は、旅籠（はたご）は一軒もなく、一般の旅人は民家に泊まっていた。幕末の天保14年（1843年）ころになると、大中小18軒の旅籠屋が営業するようになり、宿場町としての街並みが整ってきました。

一方、公家や大名、幕府の役人は、旅籠ではなく本陣に休泊しました。当時、本陣を営んでいた後藤家の資料に、宝暦11年（1671年）から天保5年（1834年）の164年間に、延べ174人が⑧石和本陣に休泊したことが記されています。信州高遠・高島・飯田の藩主が参勤交代の旅の途中に利用したほか、公家や役人が休泊しました。

なお、本陣の隣には、休泊しきれない場合に備えて脇本陣も置かれています。本陣及び脇本陣の建物は、明治13年（1880年）の火災で焼失し、現在は土蔵を残すのみとなっています。

石和宿を襲った水害

石和宿は、笛吹川と石和川にはさまれた低地にあったため、古くから水害に悩まされてきました。

江戸時代以降の記録によると、享保13年（1723年）の大洪水で150人の死者を出したほか、延享4年（1747年）の大洪水で石和村と日川村で人家150戸が流失しました。

そして笛吹川は、明治40年（1907年）の大水害で流れが一変し、現在の位置に移っています。このように石和宿は幾度となく水害に見舞われ、土砂に覆われた歴史を持っています。



石和本陣跡の石碑と土蔵



明治40年の大水害で浸水した石和宿『笛吹市風水害誌』より